

論 文

台湾への移民・開発・定住と 同族組織の形成

——福建省晋江县満族粘氏の台湾移民とその族的結合——

石 田 浩

- I. はじめに
- II. 満族粘氏の歴史
 - 1. 福建晋江县龍湖郷衙口村への移住と定着
 - 2. 台湾彰化県福興郷粘厝庄への移民と定着
- III. 彰化県福興郷への集居と地域開発
 - 1. 福興郷への集居と地域開発
 - 2. 麦嶼厝溪以西の開墾
- VI. 同族組織と地域組織の形成
 - 1. 粘姓宗親会の創設と粘氏宗祠の建立
 - 2. 村廟の建立
- V. 海峡兩岸粘氏の交流の進展
- IV. 結 語

I. はじめに

1987年夏、1988年夏と1989年春の3回、福建省晋江县龍湖郷衙口村の施氏一族の歴史と同族組織の変容を調査した。特に、同族組織の変容に関しては、1988年夏の調査においてその実態と意義につき1949年以降の土地改革や農業集団化、人民公社化、そして近年の農業生産責任制の導入と人民公社制度の解体という歴史の変遷の中で同族組織がどのように変容し機能してきたのかを、1989年春の調査において同族組織の分節の末端である祖庁が解放後どのように運営

され、どのような役割を果たしてきたのかを、考察の中心においた。これらの調査中に、満族の粘氏一族が調査村の衙口村粘厝に居住し、最近宗祠を復活させたことを知った。そこで、施氏一族との関連で粘氏大宗祠を訪問し、粘氏一族の歴史を調査するとともに、先に衙口村に移住していた施氏との関係についても聞き取りを行なった¹⁾。そして、粘氏一族から彼らの歴史資料を入手し、なぜ彼らは施氏一族が勢力を誇示する衙口村の一角に居住しているのか、彼らの存在に興味と関心をもった。1988年の第2回目の調査のおり、村の中心街の土塀に「熱烈歓迎第二次粘氏台湾同胞訪問団」の張り紙が貼られてあるを見つけ、さらに興味と関心が高まった。台湾の施氏一族についてはすでに先達の研究もあり、少なからず知っていたが²⁾、粘氏は本村から台湾へ移民していることに

1) 錢江派施氏は唐末の昭宗のときに晋江県陽溪南岸(前港)に、潯江派施氏は淳熙2年(1175年)に陽溪北岸(後港)の衙口へ移住している。衙口へ移住する粘氏は第8世の時であり、淳熙2年は粘氏では3世か4世の時であるため、粘氏よりも施氏の方が本地への移住は早い。

2) 中国と台湾との海峡兩岸における施氏一族の研究として、森田明教授の以下のような一連の労作が参考になる。「台湾における——水利組織の歴史的考察——八堡圳の場合——」『福岡大学人文論叢』第4巻第3号、1972年12月。「清代台湾中部の水利開発——八堡圳を中心として——」『福岡大学研究所報』第18号、1973年10月。以上の2編は『清代水利史研究』(亜紀書房、1974年)に収められている。「旧台湾における水利組織の植民地的再編過程——「八堡圳」の場合について——」『福岡大学人文論叢』第6巻第2・3号、1974年11月。「旧台湾における水利組織の植民地的再編政策——「公共埤圳規則」とその制定過程——」『福岡大学研究所報』第22号、1974年11月。「清代台湾における鹿港鎮の交易機能」『東洋史論』第4号、1982年。「明末清初における福建省晋江の施氏」『社会経済史学』第52巻第3号、1986年10月。「福建晋江における施氏宗族についての覚書」『人文研究』第39巻11分冊、1987年11月。「福建晋江における施氏宗族についての覚書」『アジアにおける社会変動とその諸環境に関する史的研究』(昭和62年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書)1988年3月。「台湾における宗親会の一考察——「彰化県施姓宗親会」簡介——」『中国を中心とした東アジアにおける異文化接触の基礎研究』(昭和63年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書)1983年3月。

中国側の施氏に関する研究としては、以下のような書籍や資料がある。陳碧笙『台湾地方史』中国社会科学出版社、1982年。福建省鄭成功研究学術討論会学術組『鄭成功

は少なからずの驚きであり、さらに中国の開放政策と台湾の「探親」許可により海峡兩岸の同族が再びその関係を復活させていることはより一層の驚きであった。この3回の現地調査により大陸施氏の同族結合の変容をまとめることができた³⁾。そして、今度は1987年11月からの「探親」許可以降の海峡兩岸の族的結合の意味を考察したいと構想を練ってきた。まずその手始めとして満族粘氏の台湾への移民・開発・定住と同族結合の存在形態を調査分析し、海峡兩岸の族的交流の意味を考察したいと思立った。れこで、1991年の7月・9月・11月の3回、資料収集と彰化県福興郷頂粘村と厦(下)粘村の現地調査とを兼ねて訪合した。

これらの調査による結論を先取りして言えば、粘氏の渡台始祖は同郷の施氏に連れられ、乾隆53年(1788年)に頂粘村へ、乾隆55年(1790年)に厦粘村へとそれぞれの始祖が移民した。しかし、彼らが渡台した時期は清代中期で、彰化平原の開発はすでに進展しており、粘氏が開発に入り込む地域は少なく、特別な農業技術を持たない粘氏は施氏に勧められて当時の中部台湾の中心地であり、大陸との交易港である鹿仔港近くの海岸縁に居を構えた。粘姓のみで形成したこの集落は粘姓の村であることから粘厝庄と名付けられた。粘氏の多くは漁業に従事し、旧濁水溪の僅かに堆積した海埔地(砂州)を個々に開墾して蕃薯(地瓜)を栽培した。砂州の開墾は多くの資金と集中した労働力の投資があって初めて

研究論叢』福建教育出版社、1984年。厦門大学台湾研究所・中国第一歴史档案馆編輯部『康熙統一台湾档案史料選輯』(清代台湾档案史料叢刊)福建人民出版社、1983年。莊為璣・三連茂編『閩台關係族譜資料選編』人民出版社、1984年。同『鄭成功档案史料選輯』(清代台湾档案史料叢刊)福建人民出版社、1985年。同『鄭成功滿文档案史料選訳』(清代台湾档案史料叢刊)福建人民出版社、1987年。施偉青「施琅評伝」厦門大学出版社、1987年。

なお台湾側の施氏についてはこちらの資料や文献が発行されているが、この紹介は別稿に譲りたい。

- 3) 石田浩・中田睦子「中国における同族組織の展開とその実態——福建省晋江県の施氏同族と地縁組織の關係——」『アジア経済』第30巻第4号、1989年4月、中田睦子・石田浩「中国における同族組織の分節形成と祖庁について——福建省晋江県施氏同族の調査事例——」『アジア研究』第36巻第4号、1989年12月を参照されたい。

可能となるものであり、当時の貧困な族氏一族ではこれが不可能で、族的結合は地域開発を可能にするほど強固でなかった。開発は日本領台期に入り漸く進展し、漁業から半農半漁へと農業への比重を増した。しかしながら、本村は光復後もまだ貧しく、経済が安定するのは1970年代に入ってからであり、農外就業と農外収入が増加してからである。本地域の経済的安定は粘姓宗親会の創設、粘氏宗祠の建立、村廟の建立といった、族的(血縁的)結合や地域的(地縁的)結合の再統合へと導いた。

台湾へ移民した多くの佃戸や遊民達は出身地により言語・風俗・習慣を異にし、そのため出身地別に集住するのが一般であった。そこでは経済的利害を共有し、出身地別に村落形成(地域的結合)を行なった。さらには水利開発や農業開発の進展の中で、経済発展を達成し勢力を拡大させた一部の族は、祭祀公業を形成したり宗祠を建立したりして、地域的結合から族的結合へと移行していった。これが台湾開発史の一般的特徴である⁴⁾。そこで、筆者は粘氏一族も同様の過程を辿ったのではないかと推測した。すなわち、粘氏一族は渡台後の経済的自立とともに族的再結合を果たし、日本領台期を経て光復後から現在までその族的結合を維持・発展させ、今日に到ったのではないかという推測である。しかし、粘氏の移民・開発・定住の歴史には族的結合を物語るような族産の設定や行事は存在せず、最近まで同族間の通力合作や共同の祖先祭祀等は一切存在してこなかった。この点において当初想像していた筆者の推測は完全に裏切られた。ところが、既述したように最近至って粘氏宗親会を創設し、粘氏宗祠や村廟を建立するというパフォーマンスが見られるようになった。何故粘氏は近年になってこのように族的結合を図ろうとするのか、その意図はどこにあるのか、また渡台後200年以上も経過した後、何故再び大陸粘氏との交流を再開し、海峡兩岸の関係を強化しようとするのか、これまでの台湾史の一般

4) 陳其南『清代台湾漢人社会的建立及其結構』(台湾大学考古人類系碩士論文)1975年、『台湾的傳統中国社会』允晨文化実業股份有限公司,1987年,拙著『台湾漢人村落の社会経済構造』関西大学出版部,1985年を参照のこと。

的傾向や台湾史研究から考えると疑問が尽きない。このような粘氏一族のパフォーマンスは台湾の族的結合を考察する上において大きな問題を提起していると考えられる。

本稿では大陸と台湾の粘氏一族から提供された資料や台湾開発史と老人からの聞き取りに基づいて粘氏一族の台湾への移民から現在までの歴史を再構成し、粘氏が同族村落を形成したにもかかわらず、清代～日本領台期に祭祀公業を創設したり宗祠を建立することもなく、また光復後においても長い間宗親会を設立することもなく、極近年になって漸く族的結合を図る動きが見られるのは何故か、彼らの歴史すなわち移民・開発・定住の歴史からこの点を考察する⁵⁾。

II. 満族粘氏の歴史

1. 福建晋江龍湖郷衙口村への移住と定着

『粘氏源流・渡台開基・族譜』等によれば、粘氏は中国東北部で活躍した生女真族であり、粘氏始祖（1世）の宗翰（諱は桓忠）は1078年に生まれ、天会14年（1136年）に58歳で逝世し、正隆2年（1157年）に金源郡王に、大定年間に秦王に封ぜられた。姓は完顔、名は粘没喝といい、漢名は粘罕と称した。粘姓の由来は1世の完顔・粘没喝の粘からきていることが判明する。宗翰は金朝の景祖・完顔烏古迺の曾孫に当たり、父の金源郡王・完顔撒改は金の太祖・完顔旻（阿骨打）の従兄弟に当たる。潯美（潯江・潯海）派始祖となった8世の完顔・温博察兒は江南に住んでいたが、たびたびの倭寇侵入の難を逃れるために潯美（後に本地は潯江、潯海、南潯とも称せられる。現在の衙口）へ移住した。以後、その子孫は晋江県・南安県・泉州市一帯に移住し、各地に数多くの支派を形成し

5) 本研究は、世界各地で活躍する華僑・華人の経済的ネットワークの基底にこれらの同族組織や宗親会が大きく機能しているということを論証するのが目的であったが、本稿ではこれらの点に関する具体的資料を入手できず、そこまで分析することができなかった。

た⁶⁾。例えば、『粘氏源流・渡台開基・族譜』と『粘氏歴史淵源考鑑』によれば、温博察兒の次男の9世・粘子禄は泉州へ分居し、10世・粘鳳奴は金井郷山柄へ分居した。現・深滬郷の粘氏は山柄と泉州からの移住者である。13世・粘移は許婆庄へ分居し、この一族は後に蕭妃村と粘厝埔(坡)へ移る。14世・粘尔九は玉坂へ分居し、15世・粘昂は始めて台湾へ移住した。17世・粘鵬は南安県梧坑村へ分居し、20世・粘廷璋は第2番目の台湾移住者となった⁷⁾。この結果、福建省における粘氏一族の現在の分布は、以下の通りである⁸⁾。

晋江県龍湖郷衙口村粘厝	約 200人	(46戸, 251人)
晋江県龍湖郷福林村粘厝埔	約 400人	(96戸, 530人)
晋江県金井郷塘東村山柄	40余人	(11戸, 57人)
晋江県深滬郷深滬村	40余人	(10戸, 60人)
晋江県永寧鎮沙美村と梅林村		(2戸, 27人)
南安県豊州郷梧坑村	約1,000人	(188戸, 1,049人)
泉州市(分散居住)推計	500人未満	
以上合計	2,000余人	

さらに、台湾には彰化県福興郷頂粘村と厦粘村を中心にして1万3,000人、香港やマカオをはじめとする海外に約200余人がおり、総計は1万5,600人と計算されている⁹⁾。

光緒29年(1903年)の『滬海粘氏秉珂公派族譜』によれば、13世の珞には尔光

- 6) 台湾粘姓宗親会『粘氏源流・渡台開基・族譜』1985年, pp. 21~22。
 7) 晋江県満族同胞联谊会・整理編印『満族概況與完顔粘氏』1986年11月, pp.16~17, 蔡尔登「晋江的女真満族」『晋江文史資料選輯』第8輯, 1987年, pp. 80~81, 『粘氏歴史淵源考鑑』No. 2, 晋江県龍湖公社衙口大隊粘厝村・福林大隊粘厝坡村, 1981年, p. 3。
 8) 9) 同上『粘氏歴史淵源考鑑』p.17, 福建省晋江県女真族完顔・粘氏呈申報認籌備組『粘氏呈申報認満族補充報告』No. 3, 晋江県龍湖公社衙口大隊粘厝村・福林大隊粘厝坡村, 1983年, p. 3~4, 同上「晋江的女真満族」p. 81。「台湾区各県市分姓人口数統計書」(1978年6月30日現在)によれば、粘姓は6,096人おり、彰化県に4,401人と最も多く、続いて台北県に394人、台北市365人、台中市220人となっており、上記の資料が何を根拠にして1万3,000人といっているのか不明である。楊緒賢『台湾区姓氏堂号考』台湾文献委員会, 1979年, p. 69。

・尔明・連(尔五)・接(尔八)・権(尔九)・略(尔十)の6名の息子がおり、衙口が粘氏一族の発祥地であるので、ここに粘氏大宗祠を建立し、春秋の祭祀を行なうようになった。恐らくこの宗祠は泉州市に建立された宗祠であろう¹⁰⁾。一方、衙口村にある粘氏大宗祠は現存しているが、文化大革命中に紅衛兵により破壊され、祖先の位牌も全部焼却されてしまい、倉庫として利用されてきた。これは、台湾粘氏が大陸の故郷である衙口村を訪問して聞いた話である。最近、大陸粘氏は後述するように民族成分を満族に変更する上申書を政府に提出するとともに、宗祠を簡単に修築し、簡単な祭壇を安置するようになった。また、台湾粘氏と連絡がつき、台湾との交流が始まった。

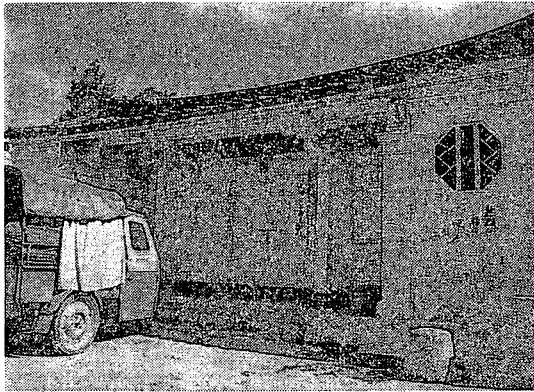


写真1 福建省晋江县龙湖郷衙口村粘厝にある粘氏大宗祠。

台湾粘姓宗親会と台湾粘氏大宗祠の世話役である粘火管会長の 応答によれば、康熙年間に19世・粘国舅と粘本性（康熙帝の母の兄）が衙口村の粘氏大宗祠

10) 前掲『満族概況與完顔粘氏』p. 17, 前掲『粘氏源流・渡台開基・族譜』1985年に『溇海粘氏秉珂公派族譜』が収められているが、筆者が粘火管会長から見せてもらった族譜のコピーは粘裕修（粘世瑤の次子）『溇海粘氏譜牒』（光緒29年（1903年）5月）であり、その中に『溇海粘氏家譜統修秉珂公派下私譜記』が収められている。恐らく傳仁が送った族譜は『溇海粘氏譜牒』と思われる。というのはどちらも光緒29年5月の発行となっているからである。また、この宗支圖叙に26世粘瓊林が光緒13年から民国36年の間の25世までの系譜を収めたと記している。

を建立した¹¹⁾。この頃の粘氏は全盛期であり、老人達の話によれば粘氏は後に靖海大將軍となる施琅を養い、施氏は粘氏に恩義があるという。しかし、20世に入ると粘氏は衰退していき、22世になって台湾へ移民をはじめた。

族譜については、すでに3世のときには譜典があり、12世・燦はこれを整理・修譜し、20世・嘉樂の時にも修譜した。1933年に25世の傳仁と傳北がさらに修譜したが¹²⁾、これらの族譜は泉州派のもので、1985年に新たに作成した『粘氏源流・渡台開基・族譜』の基礎となった。『南潯粘氏皆山家譜』(上部、1915年)には「確国公祀業記」とあり、泉州派には族産があったことが推察される。また、19世の時に19世から34世までの輩(排)行字が制定された。すなわち、敦(19世)、承(20世)、祖(21世)、徳(22世)、奕(23世)、世(24世)、傳(25世)、芳(26世)、忠(27世)、孝(28世)、為(29世)、本(30世)、詩(31世)、禮(32世)、克(33世)、家(34世)である。さらに最後の修譜のとき、泉州の粘作輯と粘秀山により「謹遵遺訓、以裕后昆文章華國、希紹前賢」と35世から50世までの輩行字が作成された。

2. 台湾彰化縣福興郷粘厝庄への移民と定着

彰化縣福興郷の由来は福建人の移民が開発した(興した)地方であることから「福興」と名付けられた。台湾總督官房調査課『臺灣在籍漢民族郷貫別調査』によれば、1926年12月現在の台中州彰化郡福興郷の本島人(台湾在籍漢族)は1万3,500人で、出身地別人口を見ると全人口が福建省泉州府出身者である。泉州府下の県では、南安縣・惠安縣・晉江縣の三邑が1万600人(78.5%)、同安縣が2,200人(16.3%)、安溪縣が700人(5.2%)と、晉江縣を含む三邑が圧倒的多数を占めている¹³⁾。粘氏一族が福建省晉江縣から移民していることを考え

11) 『清史稿』卷六、本紀六、聖祖本紀一によれば、康熙帝の母の姓は完顔ではない。恐らく、粘氏の間で誇張されて言い伝えられてきたのであろう。

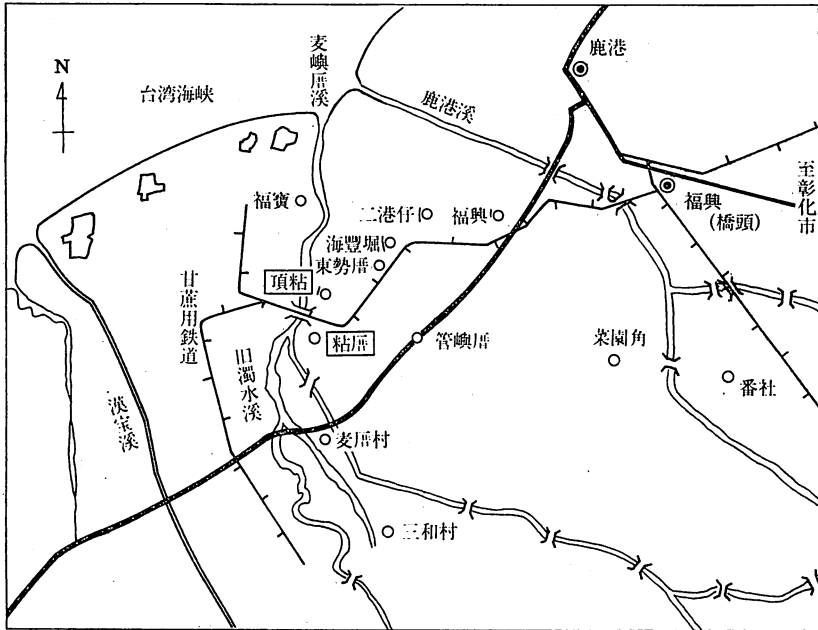
12) 『潯海粘氏秉珂公派族譜』は泉州派の族譜であり、後述するようにこの宗祠は現在工場として利用されている泉州市の宗祠と考えられる。

13) 台湾總督官房調査課『臺灣在籍漢民族郷貫別調査』1928年、pp. 16~17。

ば、この点は頷ける。

本地方への移民・開発は雍正・乾隆年間と考えられるが、いつ頃に庄が設置され始めたかは不明である。本地方には巴布薩 (Babuza) 「平埔族」の馬芝遴社があることから、雍正年間末には馬芝遴社から名付けられた馬芝遴堡が存在した。『臺灣府志』によれば、乾隆6年(1741年)に彰化県管轄区域に10保110庄・57社を設置した時に、馬芝遴堡には8庄の名前が見られる。しかし、福興庄や粘厝庄等の名前はまだ見られない。「(蕃)社」の項には「海邊熟蕃」6社の名前があり、そこに馬芝遴社の名前が見出される。道光10年(1830年)の『彰化縣志』によれば、馬芝堡は馬芝上堡と馬芝下堡に分かれ、馬芝上下堡管下に初めて粘厝庄の名が見られる。既述したように本地への粘氏の移民は1788年から始まっているので約40年を経過した道光10年にはすでに集落が形成されていたのであろう。福興庄は馬芝堡にはなく、大武郡東西堡管下にその名前が見られる。そして、「(蕃)社」の項に馬芝遴社は「歸化(漢化)熟蕃」と出ており、恐らくこの頃には漢族に同化したものと思われる¹⁴⁾。本地域の行政区画は光緒13年(1887年)に台湾府彰化県馬芝堡、光緒21年(1895年)に台湾県彰化出張所馬芝堡(同年9月には台湾民政支部彰化出張所馬芝堡)に、日本領台後の1897年には台中県鹿港辦務署馬芝堡、1901年彰化庁鹿港支庁馬芝堡、1909年に台中庁鹿港支庁馬芝堡、1920年の地方官制大改革により台中州彰化郡福興庄へと推移した。この福興庄は清代の街庄制下の福興庄とは行政規模を異にし、その行政規模は大きく、現在の郷に相当する。そして、福興庄下の粘厝は小字となった。1933年彰化市が成立し、福興庄は他庄と合併し、その行政上の名前は存在しなくなる。1945年の日本の敗戦とともに台湾行政長官公署は台湾省を8県9省轄市・2県轄市とし、彰化県は省轄市として彰化市(4区)と台中県に属した。本地方は台中県彰化区福興郷となり、その下に22カ村を管轄した。この中には粘厝が含まれ、1947年には頂粘村と厦粘村の2カ村に分かれて現在と同じ行政単位

14) 台湾銀行経済研究室編印『彰化縣志』(第一冊、台湾文献叢刊第一五六種、道光10年)、pp. 42~51。



第1図 現在の福興郷付近の開発状況

出所) 市販の『彰化縣地圖』より作成。□は調査村。

となり¹⁵⁾、現在に至っている。

粘厝庄は第1図に見られるように地理的にその集落は2地域に分かれており、これは第2図の1904年作製の『臺灣堡圖』においても2集落が描かれている。日本領台期には本地方は管嶼厝という大字に属し、その下に東勢厝・頂粘厝・厦粘厝・王厝・外出水溝・麦嶼厝の6小字(自然村)が存在した。現在、かつての管嶼厝は麦厝村・頂粘村・厦粘村の3カ村を構成している。頂粘村と厦粘村は第1図のように彰化市と鹿港鎮とを結ぶ142号公路と接する、郷の中心地である橋頭村の南西約3.3キロメートルに位置し、旧濁水溪の麦嶼厝溪下流の東に隣接している¹⁶⁾。

15) 彰化県政府『彰化縣志稿』卷一、1958~1976年、p. 129。

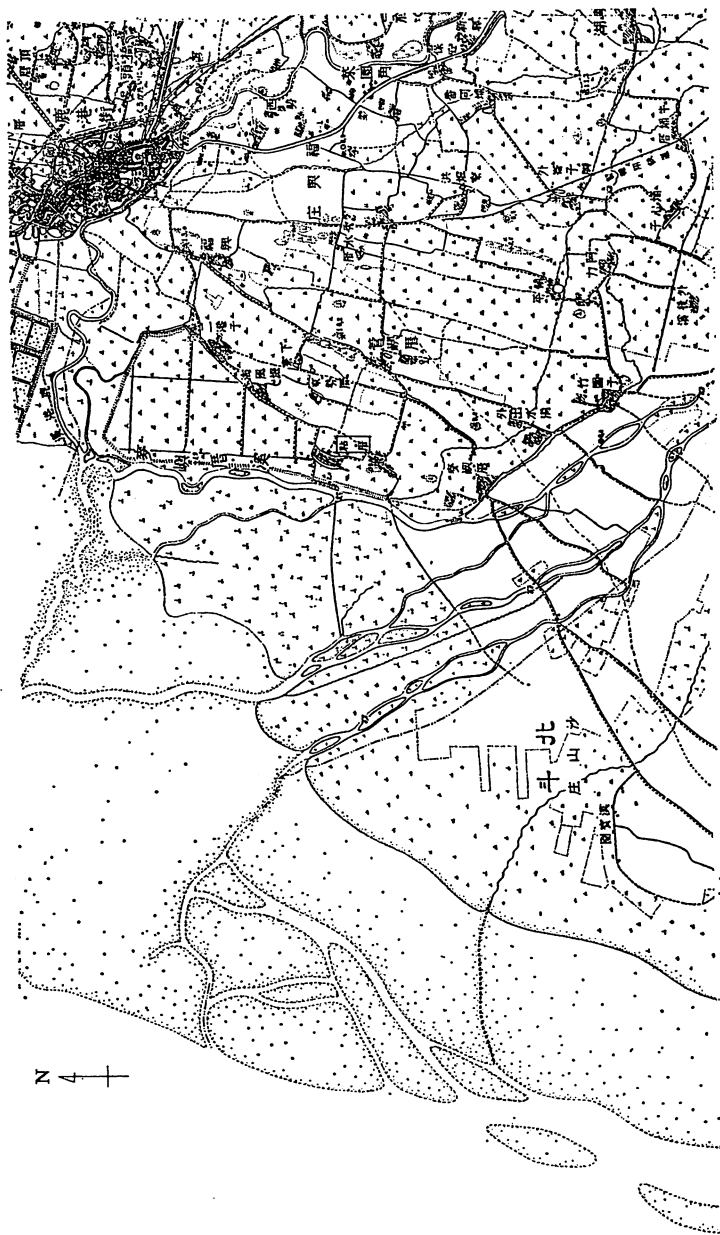
16) 17) 洪敏麟『臺灣舊地名之沿革』第二冊(下)、台湾文献委員会、1984年、pp. 289~290、p. 240。



第2図 1900年代の福興郷付近の開発状況

出所) 臨時台湾土地調査局『臺灣堡圖』1904年(1921年訂正)。□は調査村。

粘氏一族の移民史は、乾隆55年(1790年)に22世の粘粵(当時23歳)・粘恩(当時21歳)と三弟の三兄弟が祖父母(粘季瑞と姓名不明)と父母(粘水勝と吳勤)の位牌を持ち福建省晋江県衙口郷粘厝坡(埔)から南平(現・福興郷厦粘村)に定住し、乾隆53年(1788年)、22世の粘尚が41歳の時、妻子6人を連れて、故郷に祀っていた丁府千歳(丁府王爺)の香灰を抱きて北平(現・福興郷頂粘村)に定住したことに始まる。後述するようにこの丁府千歳は現在も開庄保衛の神として厚く祀られている。23世の粘揀は父粘萬頓と母莊救の位牌を持って同じく福興郷頂粘村に渡台したが、その経緯は不明である。最近、粘萬頓の墓は修築された。それゆえこれらの4名は渡台始祖となり、粘姓大宗祠にその位牌が祭られている。また、25世の粘干は粘厝坡から28歳のときに鹿港街船仔頭に定住し、その後福興郷頂粘村に移住した。23世・粘三(嘉慶22年—1817年生まれ、同治2年—1863年没)は、福建省晋江県衙口郷粘厝から彰化県秀水郷金興村へ移民し、現在その子孫は台湾東部の花蓮に移住している。25世・粘樹(道光18年—1838年生まれ、光緒2年—1876年没)は、頂粘村から台中に移住し、台中始祖となった。それゆえ、現在、頂粘村と厦粘村に居住する粘氏一族の系譜は、①頂粘村の粘尚公派下、②頂粘村の粘揀公派下、③頂粘村の粘干公派下、④頂粘村のその他の宗親、⑤厦粘村の粘粵公派下、⑥厦粘村の粘恩公派下、⑦厦粘村の粘正官公派下であり、それぞれの系譜の横のつながりがどのようになっているのかは⑤と⑥を除いて不明である。当時、この地域は粘姓の者だけが入植したので、粘厝庄と呼ばれた。老人の話によれば、台湾始祖は姻戚関係のある施氏に連れられて渡台し、全員が最初から鹿港近くの粘厝庄に入ったのではなかった。まず最初に彰化県芬園郷に入るが、パイナップル栽培技術を持たない彼らは1~2年でここを離れ、次に彰化市刺桐脚に移り、最終的に粘厝庄に定着したとのことである。現在、下刺桐脚であった南安里には呉姓と粘姓が最も多いといわれていることからこの点は頷ける¹⁷⁾。以後、徐々に大陸から移民し、居住者は増加した。それゆえ、現在の福興郷以外のこれらの地にも同族が居住している。例えば、1956年の「彰化県郷鎮市別姓氏分布表」によれば、粘姓は福興郷に450戸と



第3図 1920年代の福興郷付近の開発状況
出所) 大日本帝国陸地測量部『台湾五万分の一地図集成』学生社, 1982年。□は調査村。

最も多く、ついで彰化市に66戸、鹿港58戸、秀水郷32戸、埔塩郷28戸、二林鎮22戸、芬園郷13戸、その他を含めて704戸を数える¹⁸⁾。また、粘氏大宗祠建設のおりこれらの地域に住む同族から寄附金が寄せられている。

粘氏一族が定住した本地域は、第3図に見られるように集落が海岸線にまで迫り、耕地は少なく、当時栽培できるものは地瓜(甘薯)くらいであった。老農の話によれば、この地に落ち着いたのは姻戚関係のある施氏に紹介されたからである。しかし、それにしても十分な土地もないのにもかかわらず、何故この地に定住したのであろうか。元々、大陸の福建省に居たときから、彼らは半農半漁で漁業を良くしたので漁業することには何も問題がなかったとしても、貧困とそれに伴う人口圧力から新天地を求めて台湾へ移民してきたのであるからには、漁業よりも安定した農業に就業の機会を求めるのは当然と考えるのであるが、この点は如何がなものであろうか。それとも既述したごとく、すでに彼らの移民時期が遅く、本地方一帯はすでに開墾が進展し、彼らの入植できる空間がなかったからであらうか。ともあれ、当時の就業形態は漁業が中心で、他地で水利建設や道路工事の労働力として雇用されたりして、収入を補った。『族譜』を見ると、施氏とは大陸だけでなく台湾においても通婚が行なわれている。また、施琅の姪である施長齡(施世榜)は八堡圳を開墾し、中部台湾に一大勢力を築き、鹿港の媽祖廟である天后廟の建立等に貢献しているにもかかわらず、粘氏は施氏一族が開墾権を所有する土地を何故開墾・耕作しなかったのか、この点は疑問が残る。

Ⅲ. 彰化県福興郷への集居と地域開発

1. 福興郷への集居と地域開発

彰化県福興郷は、かつて「一府二鹿三鯤鯓」と言われ、繁栄を極めた「二鹿」の鹿仔港街(現・鹿港鎮)の南に位置する。大陸との交易港であった鹿港の

18) 前掲『彰化縣志稿』卷三, p. 398。

開発は比較的早く、清初には墾照（開墾許可権）を持った墾戸（大地主）が本土からやって来て、食い詰めて台湾へ流れてきた多くの佃戸を使ってこの地方を開墾した。その開墾の経路は鹿港から大肚溪やその上流の烏溪、濁水溪、大甲溪等の主要河川を遡り、南投県の山樞のいわゆる「蕃界地」にまで及んだ。福興郷は清代には馬芝堡に属し、雍正年間に福建省泉州からの漢人移民により漸く開拓が緒に就いたことは既述した¹⁹⁾。

福興郷が属した馬芝堡の開発史はどうであろうか。これを臨時台湾土地調査局『臺灣土地慣行一斑』（第壹編）より抜き出して見よう。

「馬芝堡 許厝埔頂厝區及海埔區一帶ハ雍正年間漳洲人許祐徳ナル者官府ニ出願シテ墾照ノ發給ヲ受ケ漳籍佃戸ヲ招テ開墾ニ當ラシメタル地方ニ係ル給墾ニ對シ佃戸ヨリ墾主ニ交納スヘキ租穀（收稔ニ割スル百分割ヲ以テ納率ヲ定メタルモノ）ヲ徴シ三年以後ハ田甲ニ對スル定額租ヲ徴スルコト殆ント一般ナルカ如シ

蕃社區地方ハ原ト馬芝遼社蕃ノ先占埔地ニ係ル清曆康熙年間蕃社ハ已ニ獨力開墾ニ從ヒシモ其進捗ノ遲慢ナル到底良好ノ結果ヲ得ル能ハサルヲ以テ幾クモ無クシテ未墾ニ屬スル埔地ノ部分ハ遂ニ之ヲ漢人ニ給出シ以テ蕃大租ヲ徴スルニ至レリ」²⁰⁾。

しかるに粘厝庄は海岸に接し開墾すべき土地もなく、周囲の土地は海埔地であった。

「海埔トハ最高潮ノ時ニ於テ水底ニ陰没シ最低潮ノ時ニ於テ水面ニ露出スル濱海ノ沙地ヲ云フ」²¹⁾とあり、また一般の土地に比して海埔地を開墾するためには、投資すべき資金と労働力を多く必要とするため、比較的開墾条件のよい地域から開墾が始まったと想像できる。当然、海埔地は開墾の最後に回された。また、「海埔ハ一般未開ノ荒埔ト同シク官府ヨリ墾照ヲ下附シ魚塭若クハ

19) 劉枝萬『台中彰化史話（上）』（台湾史話第二輯），油印本，出版年不明，p. 42。

20) 臨時台湾土地調査局『臺灣土地慣行一斑』（第壹編）1905年，pp. 49～50。

21) 臨時台湾土地調査局『臺灣土地慣行一斑』（第二編）1905年，p. 1。

園地ニ墾成セシメ魚塢ニ對シテハ塢餉ト稱スル雜税ヲ賦課シ園地ニ對シテハ正供若クハ海埔租ヲ賦課シタルコト」²²⁾とあるように、海埔地の開墾も荒埔地と同様に墾照を必要とするため、当然開墾条件の良い所から開発が進展したのも頷ける。また、当地方は塩分を含んだ海風が強く吹き、農業には適しておらず、常に自然災害に遇ってきた。それゆえ、本村の開墾が緒についたのは比較的遅く、日本領台期に入ってからである。

聞き取りによれば、村民の中でも渡台始祖の22世粘粵の直系曾孫の25世・粘添と粘梅兄弟は、その一族が厦粘村に比較的早期に入ったことから、それぞれ5～6甲の水田を所有しており、この点は日本領台期を記憶する老農達の生活からは想像できない程の土地所有である。しかし、本格的に耕地開発が行なわれるのは日本領台後期であるため、人口増加スピードに比して土地の増加スピードは遅く、たとえ移民初期に比較的多くの土地を所有しても、時間が経過するとともに耕地は細分化され小地片化されて後の世代へ継承されていったと考えられる。

ところで、本地方には一帯どのくらいの割合で粘氏が居住しているのであろうか。楊緒賢氏によれば²³⁾、年代が不明であるが、頂粘村の総戸数は210戸でそのうち粘姓が180戸(85.7%)、厦粘村の総戸数は190戸でそのうち粘姓が165戸(86.8%)、総計400戸のうち粘姓は345戸(86.3%)という統計がある。また、その後の人口増加のスピードも早い。1976年の頂粘村の総戸数と総人口は348戸・2,451人で農家戸数と農家人口は225戸(64.7%)・1,331人(54.3%)であり、同様に厦粘村の総戸数と総人口は342戸・2,063人で、農家戸数と農家人口は221戸(64.6%)・1,302人(63.1%)と、農家の割合はまだかなり高い。1991年8月現在の統計では、頂粘村と厦粘村の戸数と人口はそれぞれ451戸・2,466人(男1,292人,女1,174人)、455戸・2,871人(男1,505人,女1,366人)と、人口は急

22) 同上書, p. 80.

23) 楊緒賢「記粘氏家譜」『台湾文獻』第29卷第1期, 1978年3月, p. 16。本論文は「唐山過台湾」として大陸側の『参考消息』(1978年12期)に転載されている。

増している。頂粘村と厦粘村の時系列労働力構成統計は入手できないので福興郷のそれで見ると²⁴⁾、12歳以上の男子中に占める男子農業従事者の割合は、1951年に86.3%、1956年77.1%、1961年77.6%、1966年67.2%と急減している。1971年以降は統計処理方法が異なり、15歳以上が労働力人口と見なされており、その中に占める男子農業従事者は1971年に76.8%、1984年61.3%、1989年56.1%、1990年53.6%と急減している。一方、15歳以上に占める製造業従事者の割合は1984年23.9%、1987年24.5%、1990年30.5%と増加しており、本地方における産業構造は大きく変化しつつあることが窺える。

以上のような経済的変化が後述するように宗親会の形成、宗祠の建立や村廟の建立に結びついたと考えられる。

2. 麦嶼厝溪以西の開墾

移民初期、本村の西側を流れる麦嶼厝溪の西側は海であり、現在では約3キロメートル先まで海岸線が後退している。この点は既述の第3図からも伺える。干潮のおりには干潟ができ、個々の農家がそこを開墾して地瓜を栽培した。本地方は海からの塩を含んだ風が強く吹き、米作はあまり行なわれてこなかった。現在でも蓬萊米よりも在来米の方が多く、防風林が耕地の畦道沿いに植えられていることから、この点が窺える。本地方が本格的に開墾が行なわれ始めたのは、日本領台期に入ってからである。本地方の開発史に関する具体的な資料は非常に乏しいので、老農からの聞き取りからその当時を再現する。

厦粘村の1899年生まれのA氏の話によれば、彼が11～12歳頃の厦粘村は戸数が20～30戸で人口が100余人であった。彼は漢学堂で読み書きを習ったが、後に日本政府は漢文の学習を禁止したので、1年余で終わった²⁵⁾。当時、大陸と

24) 彰化県政府主計室『彰化県統計要覧』各年度版に基づく。

25) A氏は本村の最高齢者であるが、読み書きができ、過去の記憶も鮮明で、信頼に足るインフォーマントであった。本村はかつて貧村であったためか、多くの老人は読み書きができず、そのためか記憶が鮮明ではなかった。ちなみに、この地方には日本領台

の往来はすでになく、辛亥革命が起こったことも知らなかった。村民は浅海で漁業をしたり、旧濁水溪の浮出地(海埔地)に試植したり、打工に出かけていた。当時、水田には水稻、旱田には蕃薯、山菁(肥料用、燃料用)を栽培した。15~16歳頃、日本人・松岡がこれまで個々の農民が開墾してきた浮出地を国有財産として没収し、さらに開墾して村民に小作させた。この松岡は大正4年(1915年)4月に創設された松岡拓殖合資会社(松岡製糖会社)のことであり、松岡製糖会社は後に新高製糖会社に吸収合併される²⁶⁾。この時の租税は1甲につき約100円を納めた。A氏の父親は1分半の水田を耕作しているだけで、彼が30歳の頃に約2甲の旱田を小作した。家は貧しく、26歳の時に隣村の芳苑郷新寶村から嫁をもらった。これは当時としては晩婚である。30数歳の頃、兄弟3人は灌漑建設工事現場等で働いた。印象に残っている工事は田中から虎尾までの林内大圳建設工事である。まだ戦争に突入していない40数歳の時に、頂粘村に牡蠣養殖が入り、厦粘村にはまだ導入されていなかったなのでその技術を学習した。40~50歳の頃日本政府が測量にやって来て、個々の農民が早くから自由に開墾耕作していた土地の境界を定めた。40歳頃に製糖会社が麦厝厝溪に架かる鉄橋を建設した²⁷⁾。1938~1939年に旱地は新式糖廠(中寮糖廠・溪湖糖廠)の所有地となり、これを区画して後に、村民に貸し与えて甘蔗を栽培させた。頂粘村の粘助は糖廠の委員で製糖会社から50~60甲の土地を入手した。製糖会社の土地は光復後放領となった²⁸⁾。

期に管嶼厝公学校が創設され、皇民化教育の一貫として日本語教育が行われたが、福興郷の国語家庭は全戸数2,093戸に対して僅か4戸(0.2%)であり、彰化郡の全戸数2万5,008戸のうちの125戸(0.5%)に比較してかなり低い。彰化郡役所『彰化郡管内概況』1939年, p. 31。

- 26) 松岡拓殖合資会社は台中市曙町に大正4年(1915年)4月に開墾を業務として設立された。『台中州統計書』1932年, p. 467。
- 27) 後述するように、この甘蔗鉄道は1936年に建設されており、応答者の記憶が比較的正しいことが実証されている。
- 28) 溪湖糖廠は辜顯榮が経営する大和製糖であり、1919年に成立し、1920年に経営難から明治製糖に吸収された。福興郷はその甘蔗收穫区域に属している。『大日本製糖株式

厦粘村の84歳のB氏(26世・族長)は渡台始祖の粘粵の曾孫に当たる。15歳のときに父の粘木が死亡した。その頃、製糖会社がこの辺一帯を開墾していた。彼の経営地は3甲3分とその経営規模が比較的大きく、水稻が2甲、地瓜6分、落花生5分(後に地瓜を植える)、甘蔗3分余(2年間連作後、地瓜を植える)を栽培し、養豚と養牛を行っていた。この3甲3分のうち2甲は製糖会社から借りていた。この製糖会社とはどんな会社かと聞くと、辜頭榮の経営する大和だとの応答を得た²⁹⁾。1甲3分は自有地である。B氏は22世粘粵——23世粘淵(粵の長男)——24世粘週(淵の次男)——25世粘木(週の長男)——B氏(木の次男)であり、比較的大きい土地を相続している。しかし、水稻作は在来米であり、1分当たり1期作目が300~400斤と少なく、2期作目の平均は300斤で、時には2期作目の収穫がないときもあった。日本領台期の粘姓の戸数は約100戸であった。

頂粘村の27世C氏(81歳)の旧い家(1955年8月5日の洪水の1年前に建築)の入口には「溥海衍派」と書かれてある。これはC氏が祖父(25世粘勅)から聞いたことである。家を建てる時に入口の上に「溥海衍派」とレリーフを入れるのを人がしており、自分もこのようにもしたという。墓碑にどのようなことが書かれてあるのかは、文字が読めないのを知ってはいなかった。18歳頃は麦嶼厝溪³⁰⁾のところまで海であった(第3図参照)。では河の堤防は何時建設されたのかと聞けば、子供の頃にはすでにあったという。父の26世粘辦(光緒6年—1880年~

会社台湾支社概況』(1937年)の「台湾糖業図」と台湾糖業股份有限公司『台湾三十年史』1976年, p. 546, 台湾総督府殖産局特産課『台湾糖業要覧』(殖産局出版第640号), 1933年6月の「台湾糖業図」を参照。

29) この大和とは、鹿港街にあった土地開拓・製塩等の辜頭榮が取締役社長をしていた大和拓殖株式会社(大和製糖)と思われる。前掲『彰化郡管内概況』p. 109。辜頭榮が経営する辜頭榮三省製糖工場(改良糖廠)は明治41年(1908年)に創設されており、これと大和とがどのような関係にあるのかさらに資料を探して、この地域の開発史を考察する必要がある。『台中庁統計摘要』1915年, p. 212。

30) 本人の発音に漢字を当てると西羅溪という名前が考えられる。

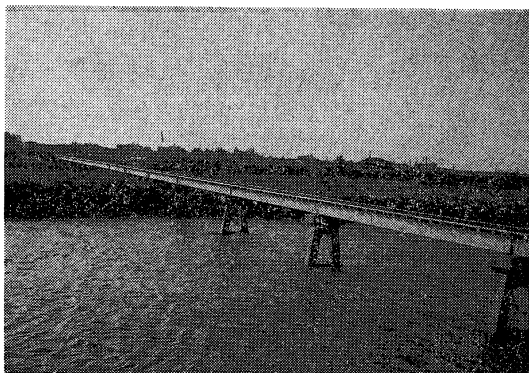


写真2 麦嶋厩溪(義和三川)にかかる甘蔗用鉄橋。
手前に頂粘村と厦粘村がある。対岸は開墾地
であり、日本領台初期はまだ海であった。

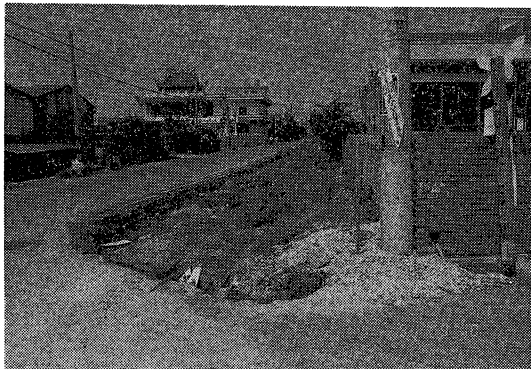


写真3 甘蔗運搬用の軌道, 現在も使われている。右
手が頂粘村, 左手が厦粘村。軌道に沿った道
を真っすぐ進めば麦嶋厩溪に出る。左手後方
に粘氏大宗祠が見える。

民国11年—1922年)の時代に日本人の松岡³¹⁾が麦嶋厩溪の外側を囲んで開墾をした。その時は地主が肥料を出し、小作農が水稻を植えた。なぜ、粘氏一族で

31) 「ションコン」と発音したので松岡と考えた。松岡は松岡富雄が経営する松岡製糖であり、台中に糖廠があった。前掲『台糖三十年史』p. 536。

開墾しなかったのかは、1年中水害や嵐で貧しく、一族共同で開墾ができなかった。また、この辺りを開墾した製糖会社としては、溪湖の製糖会社(中寮の新高)という応答が返ってきた³²⁾。

この一帯を開墾した企業として、松岡製糖会社、大和製糖会社、新高製糖会社の名前が出てきた。後に松岡と新高は大日本製糖会社に吸収合併され、大和は明治製糖会社に吸収合併される。本地方の水利開発を見ると、康熙48年(1709年)に施世榜(長齡)が95万元出資して濁水圳(施厝圳)を開墾し濁水溪上流から導水し、康熙60年(1721年)に黃士卿が十五庄圳を完成させた。その後も地方の人民は必要に迫られて和興圳、崁子脚圳、麦嶼厝圳、大義圳、慶豊圳等をそれぞれ前後して開墾・完成させている。義和圳は旧濁水系の北斗溪より導水し、員林郡溪湖庄田中央に起り、員林郡埔鹽庄及び彰化郡福興庄地方を灌漑している。さらに義和圳から和興圳、崁仔脚圳、麦嶼厝圳の三支圳に分かれ、1,600余甲を灌漑する。1900年に「公共埤圳規則」が制定されて、上記の和興圳、崁子脚圳、麦嶼厝圳は明治35年2月(1902年)に公共埤圳・義和圳に合併させられ、麦嶼厝圳は義和三圳となり、現在に至っている。さらに1923年4月に八堡圳や大義圳、慶豊圳とともに八堡圳水利組合に合併させられた³³⁾。上記の資料には早期から麦嶼厝圳の名前が出てきているが、この時に麦嶼厝溪以西の灌漑がどの程度行なわれていたのかは不明である。ところで、特殊関係にある移民組合及び製糖会社の経営に係わる埤圳は公共埤圳に組み込まれることなく、小さな埤は認定外埤圳として残った。例えば、大日本製糖の福寶圳は認定外埤圳として、33万甲(1942年には32万甲)の耕地を灌漑・排水しており、日

32) 新高製糖会社は彰化と嘉義に工場を持っており、溪湖工場は明治製糖の工場である。佐藤吉次郎『台湾糖業全誌』1926年、pp. 18～32の「新高製糖株式会社」の項と台湾総督府殖産局特産課『台湾糖業統計』第27(殖産局出版第901号)1940年12月の「台湾糖業図」を参照されたい。

33) 蔡炎輝・繆治捷『台湾省各地水利委員会概況』台湾省水利委員会聯合会、1954年、pp. 257～259。台湾銀行金融研究室編印『台湾之水利問題』(台湾研究叢刊第四種)、1950年、pp. 74～75。

本領台末期になって開発され始めたことが窺える³⁴⁾。地理的には福寶圳は頂粘村の北に位置する二巷村福寶(現在の福寶村)にあり、二港仔の西方約1.2キロメートルの所で、麦嶼厝溪下流の西岸にあって、河口より約1.2キロメートルの所である。昔この地方一帯は海埔新生地であった。日本領台期に頂番婆に住む謝慶がここに福寶合作農場を開設し、堤防を築き植林して防風林とし、ついにアルカリ地を良田とし、計272甲を開墾した³⁵⁾。そして、1948年に彰化県福寶甘蔗合作農場となった。また、1936年に大日本製糖は麦嶼厝溪に架かる鉄橋を完成させ、ここに鹿港街近くの橋頭から鉄道を延長させ、甘蔗を彰化製糖工場へ運ぶことを可能にした³⁶⁾。

Ⅳ. 同族組織と地域組織の形成

1. 粘姓宗親会の創設と粘氏宗祠の建立

1971年冬、鹿港に居住する粘文と福興郷に居住する粘都の二人が台中で会い、福興郷頂粘村と厦粘村に粘姓が多数居住し、その人口は約六千人にも達しているにもかかわらず、同族はバラバラであり、相互扶助もなく、時には争いもあることから、各宗親の協力団結・相互扶助を図るための宗親会を組織することを話し合った。1972年に粘文が過労で倒れてから、粘文賓が中心となり粘都と協力して宗親会の準備会を形成し、粘文賓が理事長となった。1973年3月

34) 台中州産業部土地改良課『台中州水利梗概』1939年, pp. 8~9, p. 24, 同『台中州水利梗概』1942年, p. 35。

35) 前掲『臺灣舊地名之沿革』p. 284。また、農民の応答の中にも福寶を開墾した謝慶の名前が出てきたことから、この地域の開発の遅いことが窺える。ただし、本書では合作農場という用語が使用されているが、日本領台期に合作農場というものが存在したかどうかは疑問である。合作農場は光復後に使用された用語である。

36) 台湾総督府交通局鉄道部『昭和10年報』1936年, 同『昭和11年報』1937年, 同『昭和12年報』1938年。『昭和11年報』には福興郷第二次延長線5キロメートルの敷設出願と鉄道線路表とが大日本製糖株式会社彰化製糖所の項に出ており、この甘蔗用私設鉄道は1936年に建設されたと推測できる(p. 294)。

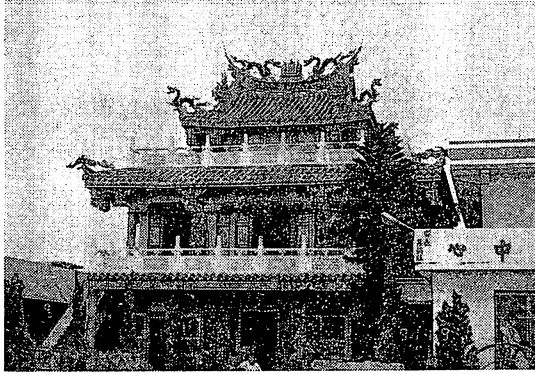


写真4 三層よりなる粘氏大宗祠。その左右に活動中心が見られる。右手の活動中心は幼稚園として利用されている。

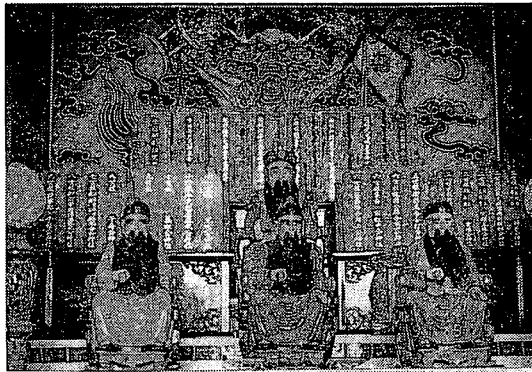


写真5 廟の2階中央に祀られる位牌と祖先の像。中央奥が1世の宗翰，手前の三像は渡台始祖で，右から22世の尚，23世の粵，23世の思。

14日に彰化県粘姓宗親会が正式に成立し、粘火宮が招集人兼総幹事となって大会を開催した。その時、毎戸から200元を集めたり、その他にも各地の同族から寄付金等を集めたりしてこれを基金とし、4万8,000元を投資して粘氏宗祠建立のための土地を480坪(坪当り100元)を購入した。そして、「台湾粘氏宗祠恒忠堂管理委員会組織章程」を制定して、大会を開いて決議・通過させた。1974

年に宗祠建設に着手し、1976年に646万5,000元(土地費用は除く)を費やして粘氏宗祠の1階部分(桓忠堂)を建設し、祖先の位牌を安置した。また、建設に貢献した董事や委員の名簿を作成した。1981年に祖先の位牌を安置するために2階部分(衍慶宮)の建設に着手し、翌1982年に完成させた。同時に完成式典を行ない、1984年には2階部分の建設に貢献した董事や委員・顧問の名簿、族譜の編輯、渡台後約200年・9世代の歴史、渡台始祖家譜等を編纂した³⁷⁾。そして1988年5月と7月に始めて福建省晋江龍湖郷衙口村を訪問し、大陸の同族との交流を果たした。また、1980年には建祠六周年記念祭典を実施し、『聯合報』等の新聞でこれが大きく報道された³⁸⁾。これが満族協会の目に止まり、満族協会とも接触するようになった。

ところで、粘姓には、社団法人の彰化県粘姓宗親会(後に台湾粘姓宗親会となる)と財団法人の台湾粘氏大宗祠の二つの組織がある。彰化県粘姓宗親会は1972年8月15日に成立し、1973年3月14日に彰化県政府の承認を得た。宗親会の運営は理事会(現在は6期)により行なわれ、3年任期の理事15名、理事長は互選により選出、監事は3年任期の3名である。3年任期の総幹事1名(40歳以上)1

37) これが前掲『粘氏源流・渡台開基・族譜』である。この族譜作成の基礎となったのが以下の資料である。

- ①粘忠判『粘氏源流記要』1980年。
- ②粘火管『粘氏起於女真族及姓源考略』1980。
- ③粘火管『粘氏先祖来台湾開基始祖粘粵家譜②』1980年。
- ④粘火管『粘恩公支派進祠紀念簿』1974年。
- ⑤粘火管『粘氏先祖来台湾開基始祖粘恩家譜』1980年。
- ⑥粘火管『粘氏先祖来台湾開基始祖粘尚家譜④』1980年。
- ⑦粘火管『粘氏先祖来台湾開基始祖粘正官家譜②』1980年。

以上の資料は、趙振績『台湾区族譜目録』(台湾省各姓歷史淵源發展研究学会、1987年)に整理されている粘氏族譜マイクロフィルムである。

38) 陳清喜「聚居彰化粘厝生女真族後裔將舉行傳統盛典宗親大會」『聯合報』1980年2月17日。このときに報道された新聞記事「粘厝村是女真族後裔」が『人民画報』1980年12月期に転載された。大陸粘氏はこの記事を前掲『粘氏呈申報認滿族報告』No.1の上申書に添付した。

名と幹事（30歳以上）2名は理事会で選出され、具体的な管理・運営に携わる。宗親会への参加は粘姓であり、年間200元の会費を納める者は誰でも会員になれる。ただし、台湾には「高山族」の中にも粘姓はいるが、彰化県粘姓宗親会は滿族であることから会員の出自は全て大陸である。しかし、建前上、宗親会は滿族以外の粘姓を排除するものではない。そこで、財産管理においては宗親会とは別に台湾粘氏大宗祠董事会を設け、基本的に同一出自者がこれを運営する形式を取っている。現在では台湾粘姓宗親会となり、總會は福興郷厦粘村に置き、台中と台北には分会が置かれている。

一方、粘氏大宗祠は31名の終身職の董事により董事会を組織し、この董事の互選により選出された任期5年の董事長が具体的運営を行なう。この董事は宗祠建設等で最も多額の寄付をした者達が担当し、主要には財産を管理する。すなわち、寄付等で宗親会に入った金は台湾粘氏大宗祠董事会に入り、ここで管理される仕組みである。また、宗親会には輩行が最も高く、しかもその中で最高齢者が名誉職としての族長となっており、現在は26世B氏（84歳）が族長に、同じく26世の粘徳煙と粘都が副族長となっている。一応、輩行字があったとしても、実際に子孫の名前に輩行字を使用しているわけではなく、使用していない者の方が多い。生存する世代は26世から31世までであり、26世の生存者は数名となっている。

台湾粘氏大宗祠と台湾粘姓宗親会は毎年春祭（清明節）と秋祭（重陽節）の2回祖先祭祀を実施している。実際には春祭が農曆1月4日に、秋祭が10月6日に実施している。これは2月15日が頂粘村の村廟・鎮興宮と厦粘村の村廟・寶順宮の主神である丁府千歳の誕生祭であり、この日は新曆4月5日の清明節と近いので、清明節ではなく農曆の1月4日に実施している。秋祭を10月6日に実施するのは10月に玉皇大帝の祭祀があり、その時に村出身者が帰郷することが多く、便利であるためである。

このような動きの中で、祖先に対する崇拜の念は高まり、墓の修復等がなされている。例えば、頂粘村への渡台始祖である22世粘粵の長男の23世粘淵の墓

は1985に修復され、また22世の粘萬頓の墓も修理された。

2. 村廟の建立

既述したごとく清代の粘厝庄は粘姓のみが集居する一行政村であるが、地理的には二つの集落に分かれていた。しかし、地域的統合の象徴である村神の祭祀は移民初期、頂粘村と厦粘村の2村で共同祭祀していた。両村が祀る主神は故郷の晋江県衙口郷粘厝坡で祀っていた丁府千歳であり、1788年に頂粘村へ移住した22世の粘尚が渡台時に故郷から分香して護身として身に付けてきたも



写真 6 1986年に建立された頂粘村の鎮興宮。

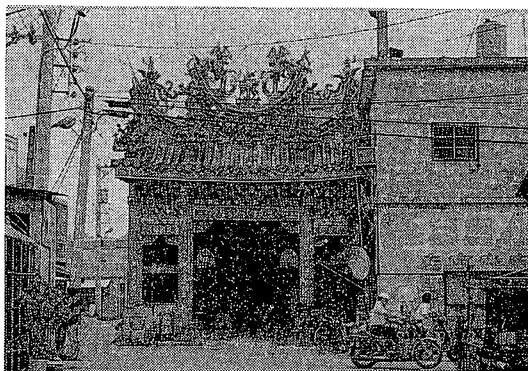


写真 7 1981年に建立された頂粘村の文武廟。

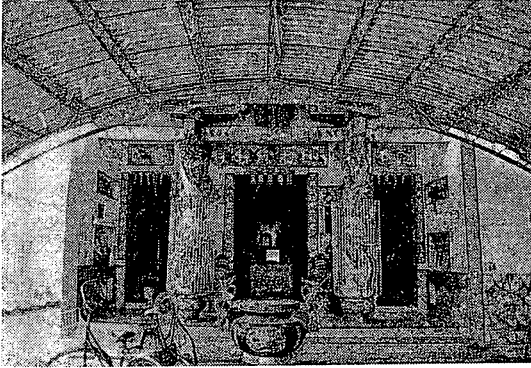


写真 8 1982年に建立された厦粘村の宝順宮。

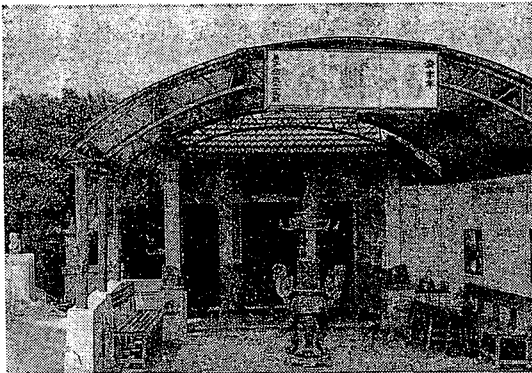


写真 9 麦嶼厝溪のそばに立つ厦粘村の土地廟・福興宮。1980年に建立された。

ので³⁹⁾、村落開発のうちに村神として祀り始められた。光緒24年(1898年)に26世の粘添・粘梅兄弟がさらに丁府千歳を一尊彫り、頂粘村のを大王と称し、厦粘村のを二王と称して両村でそれぞれ一尊神を祀った。しかし、当時両村とも神を安置する廟を建立するだけの財力はなく、爐主となった家に毎年輪番に祀

39) 筆者が訪問した衙口村の粘氏が集居する粘厝の村廟・丁王府館では確かに丁府千歳が祀られている。前掲拙稿「中国における同族組織の展開とその実態——福建省晋江県の施氏同族と地縁組織の関係——」を参照のこと。

り、2月15日の生誕日には祭りを行なった⁴⁰⁾。

頂粘村で最初に建立されたのは文武廟である。この廟神の武安尊王は三和村(坂仔脚)の童粘の粘岸が70年前に本村へもってきたもので、それを村民の粘瑞珍が祀っていたのを、1980年10月に建宮籌備委員会を組織し、村民から寄付金を集めて廟に祀るようになった。すなわち、1980年農曆11月12日に建設着工し、1981年農曆10月26日に文武廟は完成し、太子元帥・什三王爺・武安尊王・白府千歳・龍興千歳・吳府千歳を安置した。なぜこのように廟を建立する必要があるのか、その場に集まった村民達は口々に他姓が廟を持っているので、自分達も持たなければならぬという観念から建立したと述べた。続いて1986年に丁府千歳の鎮興宮が建立された。すなわち、1984年に爐主や門徒が集まって建廟の相談をし、基金を募って1986年10月に鎮興宮を建立し、丁府千歳を安置した。また、蕭府千歳(5月17日)や邢府千歳(8月20日)・鳳冠夫人(6月22日)・中宮太子元帥(9月9日)等の培神をも同時に祀った。これらの培神にはそれぞれ由来があり、例えば蕭府千歳は、道光25年(1845年)に天然痘が流行り、蕭府千歳の神靈に頼り病の流行が治まったので、蕭府千歳の神像を彫り、手厚く祀るようになったことによる。それまでは粘灯火(鹿港人)の家に十数年間祀っていたが、引っ越したのでこの土地を買上げ、そこに廟を建立したのがその経緯である。その他に土地公もあるが、確認してはいない。

厦粘村では1981年に村民信徒が集まって建廟の相談をし、男女を分かつず1人1丁とし、1丁につき500元を分納で、前期に200元、後期に300元を集めるとともに、村内外から寄付金を仰いだ。1981年農曆5月8日に寶順宮(別称・保順宮)建設の鋤入れを行ない、1982年農曆2月15日に丁府千歳を安置し、落成記念式典を行なった⁴¹⁾。厦粘村には土地公の福興宮がある。頂粘村と厦粘村との境界にある海岸へ通じる道を西へ行くと、麦嶼厝溪におつかりり、そこには通行用の橋と甘蔗用の軽便鉄道の鉄橋が架かっている。その橋のもとに土

40) 41) 福興郷寶順宮管理委員會『福興郷厦粘寶順宮管理委員會組織章程』1981年参照。

地公がある。この土地公も1980年に村民の寄付により建立され、壁にはその時の寄付者名がレリーフに彫られている。

以上のように、宗親会の形成や宗祠の建立と同様に、村廟の建立は1980年代前後に行なわれている。このことは1980年代に入って漸く頂粘村と厦粘村の経済的基盤が確立されたことの証左であり、経済的基盤なくしては族的結合も地域的結合も困難なことを物語っている。

V. 海峡兩岸粘氏の交流の進展

福建省から台湾への移民後も、大陸の粘氏と台湾の粘氏は清代～日本領台期を通じて交流を行っていた。ただし、その交流とはたまに手紙の遣り取りがある程度で、互いに自分達の同族が海峡兩岸のどこに居住しているのかを知っている程度であった。しかも、渡台後の世系を辿ることが可能であるとしても、大陸の1世からの世系を辿ることができず、族譜もないままであった。そこで、族譜もなく自分達の系譜も知らないことは遺憾であると考えた、28世の粘芳模は1923年に鹿港天后宮の媽祖が福建省莆田市湄州島へ進香するおり、故郷の晋江県衙口に立ち寄り、族譜を抄録しようとした。しかし、要領を得ず、族親の粘傳仁にこの件を頼んで厦門を經由して帰台した。10年後、粘傳仁は『潯江粘氏敦業公派下家譜』一冊を写し終え、台湾へ送ってきた⁴²⁾。この族譜が存在するので、台湾粘氏の大陸での系譜を理解することが可能となった⁴³⁾。

42) 前掲『粘氏源流・渡台開基・族譜』pp. 32～33, 前掲「記粘氏家譜」p. 16。本族譜は鹿港街に住む29世の粘忠泉が所有しており、『粘氏源流・渡台開基・族譜』の中に本族譜は整理され収められている。その他の族譜として『潯海粘氏牒族』（光緒29年5月）があるが、これも泉州派下の家譜である。また、泉州市区には粘氏宗祠があり、文革後この宗祠は工場として利用されている。台湾粘氏はこれも修復する相談を受けたが、中国側政府からは衙口にある宗祠を修復するのであるから、二つの宗祠を修復する必要はないと断られた。

43) しかしながら、この『潯江粘氏敦業公派下家譜』は泉州派の族譜であり、現在の福興郷に居住する粘氏は晋江県衙口からの移民であることから、大陸の1世からの系譜と台湾での渡台始祖以降の系譜とが繋がらない。

しかし、光復後は互いの交流は全く途絶えてしまった。中国共産党第11期三中全会以後、大陸はこれまでの路線を大きく転換し、経済改革と対外開放という政策を打ち出し、大陸の対外関係は進展した。このような状態の転換により香港に居住する宗親は大陸の故郷と連絡を取り始め、情報交換を行なうようになった。厳しい政治状態から民族の出自を自由に主張できる雰囲気が出てくると、大陸の粘氏一族は自分達が女真族であることから、満族の成分を回復しようとする動きが出てきた。衙口村の粘忠助・粘為慶・粘芳坑、および粘厝坡の粘芳聰・粘忠木・粘忠火等が中心になり、満族という民族成分を回復するために中央政府や福建省政府、関連各機関に上請書を提出した。参考までにその提出先を紹介すると、中共晋江県統戦部、中共福建省委統戦部、福建省人民代表大会民族事務委員会、中央人民代表大会民族事務委員会、晋江県人民政府、中共晋江県委員会、福建省人民政府、中共福建省委員会、晋江県民政局、福建省民政庁、中共晋江地委統戦部、泉州市歴史研究所、中共晋江県龍湖公社党委員会、中共晋江県金井公社党委員会、中共晋江県深滬公社党委員会と数多い機関である。まず、粘氏は1981年に『粘氏歴史淵源考鑑』と申請書『粘氏呈申報認満族報告』を作成し、1982年4月に民族帰属成分の回復の承認を要求した。1983年1月には『粘氏呈申報認満族補充報告』を作成して2回目の上申書を提出し、1983年9月15日には『再次呈申報認回復満族成分呈批報告』を作成して第3回目の上申書を提出した⁴⁴⁾。この結果、1985年7月4日に晋江県人民政府(183号文件)より、1985年12月10日には泉州市人民政府(007号文件)より、1989年5月19日には南安県人民政より完顔・粘氏の満族成分が確認された。文革時

44) 福建省晋江県女真族完顔・粘氏呈申報認籌備組『粘氏呈申報認満族報告』No. 1, 晋江県龍湖公社衙口大隊粘厝村・福林大隊粘厝坡村, 1981年。前掲『粘氏歴史淵源考鑑』No. 2, 前掲『粘氏呈申報認満族補充報告』No. 3。福建省晋江県女真族完顔・粘氏族民『再次呈申報認回復満族成分呈批報告』No. 4, 晋江県龍湖公社衙口大隊粘厝村・福林大隊粘厝坡村, 1983。特に、ここで重視しなければならないことは、大陸の粘氏が作成した上申書や資料には台湾で作成された資料が利用されていることであり、これは既述したように香港に居住する宗親を通じて入手していたからである。

に粘氏大宗祠は紅衛兵に破壊され、祖先の位牌も焼却されてしまった。宗祠は人民公社の農業倉庫として利用され、屋根の傷み等が激しく、簡単に修理を施して祭壇を設けるようになった。台湾粘姓宗親会に匹敵する晋江県満族同胞聯誼会を組織し、台湾とのコンタクトを取るようになった。

一方、台湾の粘氏は、1971年冬に宗親会を結成しようと話し合いを持ち、1972年に宗親会結成準備会を組織した。1972年8月15日に彰化県粘姓宗親会の申請を行ない、1973年3月14日に県政府の承認を得た。1972年8月10日の宗親会形成のおり、中部工業衛生中心主任で山東省出身の27世・粘忠判がやって来て、粘氏が女真族であることを伝えたが、彼らの幾人かは自分達が女真族であることをすでに知っていた。1976年には粘氏宗祠の1階部分（桓忠堂）が完成した。1980年農曆1月4日に建祠6周年記念祭典を行ない、これが『聯合報』等の新聞に掲載され、満族協会は粘姓の存在に気付いた⁴⁵⁾。また、1980年には国立政治大学の邢鑒教授は粘氏が満族であるということを伝えた。しかしながら、粘氏は自分たちは女真族であり、満族という概念も理解できず、満族であるということを認めたくもなかった。1982年には2階部分（衍慶宮）を完成した。1986年に満族協会からD女史が派遣されてきて、満族協会への参加を勧め、同年さらに満族協会秘書長のE氏が粘姓の新春聯歡会に参加し、満族協会への加入を勧めた⁴⁶⁾。そこで、1986年に粘姓は自分達が満族であることを認め、満族協会に加入した。また、1986年4月か5月に香港の宗親である粘本初が大陸の粘姓とのパイプ役を果たし、大陸との交流をつないだ。大陸側から最初の手紙があり、1987年11月に「探親」が認められるようになったので、1988

45) 前掲「聚居彰化粘厝生女真族後裔將舉行伝統盛典宗親大会」

46) 満族協会と粘姓とのコンタクトの時期についてはそれぞれの応答が少し異なる。満族協会がなぜ積極的に粘氏の加入を勧めたのかは、台湾には満族は1万人ほどいるが、現在の会員は約400人と少なく、福興郷に粘姓が約6,000人にいることから、粘姓が加入すれば大きな組織になると考えてのことらしい。索文蔚「粘氏宗親新春祭春祭祖親禮記」『満族文化』第10期、1987年1月（pp. 49～50）によれば、1987年の粘氏春祭に満族協会の理事長をはじめ8名が参加しており、満族協会の粘氏宗親会にかける期待は大きい。

年5月に初めて故郷の福建省晋江县龍湖郷衙口村を訪問し、直接交流を開始した⁴⁷⁾。第2回目の「探親」は同年7月であり、この時筆者は村のメイン・ストリートに彼らを歓迎する旨の張り紙を見つけた。粘火宮会長によれば第1回目の「探親」の時、大陸側の粘氏から粘氏大宗祠の修復の話を持ち込まれ、経済的援助を要請される。その修築費は150万台湾元と高額である。しかし、台湾粘氏はこれに応ずるべく、財団法人粘氏大宗祠董事会はこの件について相談をし、1991年12月に訪中し交渉することになった。

VI. 結 語

1970年代に入って以後、粘氏は急速に族的再統合を図ろうとしてきた。しかしながら、これまで一族が一つの地域に集居してきた歴史はあっても、故郷から持ってきた丁府千歳を集落共同で祭祀してきた神明会以外、具体的には族的結合を図るものは何もなかった。B氏の言葉を借りると、族内の関係は非常に希薄である。すなわち、本人は祖先が何処から来たのかということや、女真族であるということも知らなかった。宗親会ができるまでは族長もいなかった。同じ粘氏であっても近い親族は知っているが、族中には知らない人が多い。宗親会が成立した後、女真族であるということを知ったし、自分が26世であるということを知ったが、現在も何のことだかよく分からない。まして自分が満族であるという意識もない。宗親会ができて別にも大したことではないという。あるいはA氏は、粘姓が満族であることは知らなかったし、宗祠建立後も知らなかった。1983年になって漸く知った。しかも、現在の粘氏には満族としての伝統や文化は何も残っておらず、日常生活様式は全く漢族と同じである。大陸にいる粘氏も漢化しており、台湾粘氏は大陸から移民してくる以前からすでに漢化していたものと思われる。これが台湾粘氏のこれまでの実情である。『聯合報』の記事によれば、これとは反対に粘氏の過去の族的結合を

47) 満族協会 はすでに1987年に晋江县龍湖郷衙口村を訪問し、大陸の粘氏と接触しており、海峽兩岸の交流には満族協会も大きな役割を果たしている。

窺える二三の事例もある⁴⁸⁾。すなわち、光復前に本地方で集団械闘事件が発生したとき粘厝の住民はみんな集団行動をとっており、もめ事が起こったときにも住民は各戸毎に訴訟費用を分担して集団訴訟を行ったという記事がある。また、最近では彰化県議員選挙において粘厝の2,000余人は一致行動して粘富雄を議員に再選しており⁴⁹⁾、粘富雄は福興郷郷長をも務めた。

ところで、何故粘氏は最近になってこのように族的結合を図ろうとするのか。あるいは何故大金を使用してまで大陸の粘氏大宗祠を修復しようとするのか。本研究からその明確な回答はまだ得られない。しかし、このような族的再統合の動きに対して幾つかの推論が成り立つ。ここでその推論を展開し、結語にかえたい。

まず第一に、族的結合を図るにはこれまでその経済的基盤が弱く、経済が安定しはじめた1970年代に入り、これが漸く可能になったことである。しかし、これは必要条件ではあっても十分条件ではない。

第二に、大陸に居たときから親しい関係にあった施氏は彰化県施姓宗親会をはじめ、台北、台中、嘉義、台南、高雄に宗親会を組織し、さらには世界施氏宗親總會までも組織するといったような活発な活動を営み、大陸からの自己の偉大な出自を他姓に宣伝してきた。粘氏はこれに触発されたようであるが、外的には、中部台湾、台湾全土、延いては大陸をも含めて自分達の出自があつた偉大なる金朝や清朝といった王朝を作つた末裔であることを主張し、同族の団結を誇示し、地域社会に大きな面子を維持できると同時に大きな力を保持できるからである。内的には、自らの保護は国家よりも自己の社会関係、すなわち家族主義を基盤とする族的結合や出身地を同じくする者達の同郷組織に依存するという中国の伝統的観念に基づくからである。

第三に、積極的に族的再統合を図ることによって、具体的な形の大きな社会的経済的利益が得られることである。宗親会や宗祠等の活動を積極的に行なっている者は粘氏全体に及んでいるわけではない。このような活動は必ず積極的

48) 49) 前掲「聚居彰化粘厝生女真族後裔将举行伝統盛典宗親大会」を参照のこと。

な組織者が存在して初めて可能となる。組織者は宗親会や宗祠という組織を基盤にして自己の利益を追求することが可能となる。すなわち、伝統的同族結合が「同床異夢」であったとしても、その「共同幻想」の上に乗っかって選挙に打って出たり、一族の代表として公社会に出て行ったり、あるいは集団のまとまった金で大きな社会活動が可能となるからである⁵⁰⁾。例えば、粘氏大宗祠の敷地内に村の活動中心や幼稚園が附設されているが、県政府や郷公所は宗祠が村民をとりまとめる象徴としてその存在を認め、補助金を出して活動中心や幼稚園を建設した。

第四に、第三の経済的利害と関連するが、大きな集団を形成することにより様々な情報ネットワークを形成することができ、商売や交易、資金の獲得において有利となる。例えば、東南アジア各国をはじめ北米における宗親会と横の連絡をつけて世界宗親会を組織し、世界に広がる華僑・華人のネットワークを持つ宗親会は多い⁵¹⁾。粘氏の例で言えば、シンガポール・マレーシア・フィリピンにも一族がおり、台湾に宗親会があれば将来これらの一族と交流可能な受

50) 選挙において宗親会が果たす役割については前掲拙著『台湾漢人村落の社会経済構造』と堀江周俊一「親しい他人と見知らぬ親族——台湾漢族における二つの擬制的親族」『文化人類学』5、アカデミア出版社、1988年2月を参照されたい。中央研究院での本研究の発表において、多くの研究者から宗親会の創設は選挙と大きく関係している旨の指摘を受けた。

51) 筆者は宗親会が主催する宗祠落成記念式典に出席し、外国から大勢の同族が出席しているのに驚いたことがある。例えば、施姓宗親会は世界施氏宗親總會といった組織を持ち、世界大会を開いてきたが、台湾施氏とフィリピン施氏との交流は長い歴史を持ち、そこには大陸や諸外国との施氏を取り結ぶだけでなく、経済上の大きな結びつきがある。王崧興氏も宗親会が海外の華僑と台湾の国民政府を結びつける手段となったことを上げている。すなわち、「華僑の実際の故郷は中国本土であるが、国民政府は「宗親会」の血縁関係を利用して華僑をひきつける手だてとしており」と、政策上の意味合いが強いことを述べている。王崧興「中国の家族制と近代化」河野健二編『近代革命とアジア』名古屋大学出版会、1987年、p. 149。また、森田明、前掲「台湾における宗親会の一考察——「彰化県施姓宗親会」簡介——」、拙稿「北米における華人社会と華僑・華人に関する研究文献目録」(上)(中)(下)関西大学『経済論集』第41巻第2号・4号・5号、1991年7月・11月・1991年1月を参照されたい。

け皿となる⁵²⁾。また、今後大陸との交流を一層促進することで、大陸への投資や安価で豊富な労働力を利用する経済活動の機会が多くなるであろう。

第五に、大陸の共産党政府に対し台湾こそが伝統中国を維持し、中華文化の中心地であるとして、国民党政府が積極的に宗親会の組織化を奨励したからである。すなわち、宗親会が台湾人である本省人と外省人の対立を融和し、台湾住民を統合させるとして、宗親会の組織化を奨励しており、また、海外華僑や華人を台湾側に引きつけるためにも宗親会は一定の役割を果たすと考え、奨励されてきたからである⁵³⁾。特に、1973年からの「十大建設」に見られるように、政府は1970年代に入ってから社会資本を充実させ始め、台湾に対する政府の位置づけがこれまでの「仮住まい」から「定住」へと変化した。これにより、民間団体の組織化にも同様の変化が現れたと考えられる。

〔追記〕本研究において粘氏宗親会の粘火営会長宅に宿泊させて戴き、調査を行った。粘火営会長をはじめ多くの粘氏一族の方々には大変お世話になった。また、資料収集や調査において、友人であり台湾研究の師である私立樹徳工業専科学校の張美嬋氏、その夫君である丁増藩氏、満族協会の廣定遠氏、台湾文献委員会の王世慶氏、台南市出身で関西大学経済学部卒業生の陳典興氏、友人の甲南大学の中田睦子氏、大阪市立大学院生の山田敦氏には大変お世話になった。ここに記して感謝したい。また、本研究は1991年12月21日～22日に中央研究院台湾史田野研究室主催の「台湾歴史的な土地問題 国際学術研討会」

52) 粘氏宗親会「粘氏姓源考略」『満族文化』第11期、1988年2月、p. 11

53) 王崧興、前掲「中国の家族制と近代化」pp. 148～149、民国78年度の『彰化県統計要覽』1990年から初めて宗親会に関する統計が出ており（pp. 188～189）、それ以前においては宗親会は公益団体の中に入れて統計処理されていた。ちなみに1989年の彰化県下の宗親会数と会員人口はそれぞれ21団体、3,857人であり、1990年は23団体、4,328人であり、1988年が18団体であることからこの2年間で5団体増加していることになる。彰化県政府主計室『彰化県統計要覽』（民国79年度）1991年、pp. 188～189。

で発表したものである。コメンテーターの中山社会科学研究所の張炎憲氏をはじめ会場から多くのアドバイスや質問を受けた。これらの諸氏に対しても感謝したい。